巻頭特集　資料室

戦後 80 年特別展示「自由学園と戦争－記録資料から学び、今に活かす」

菅原然子　村上　民

自由学園図書館資料室は、2025 年度 1 年間をかけて「戦後 80 年記念展示　現在（いま）は戦後か戦前か？」と題する展示を行った。児童・生徒・学生、教職員と共に戦争について考える時を持つことを目的に、11 月 23 日には JIYU1123 にて館内で展示を行い、600 名近いお客様にも見ていただくことができた。

■資料を通じて戦争を考える

自由学園図書館資料室では、数年前より館内 1 階出入口付近において資料室と共同で学園に関する展示を行ってきた。学園の歴史への興味を喚起するとともに、普段の生活がどのような歴史の上に成り立っているのかを在校生に知ってもらうことを目的としてきた。

2025 年は戦後 80 年の年である。自由学園は 1921（大正 10）年に創立した学校なので、第二次世界大戦を経験している。戦中の学校の様子については、『自由学園一〇〇年史』（自由学園出版局　2021 年）にまとめてある。今回は自校の戦争経験だけでなく、自分の足を使って実際の戦跡を訪ねてみることや、現在世界で起こっている戦争について知見を深めることなども重視し、企画をした。

①戦争の記憶・記録を訪ねてみよう（1～2 学期）

自由学園内、武蔵野・多摩地域、東京その他の地域に現在も残る戦争の痕跡を、夏休みに自分の足を使って実際に訪ねてみることをすすめる展示とした。各施設の展示案内のチラシを置いたり、Google の「MyMaps機能」を利用し、各地にある主要関連施設の情報をマッピングし、公開した。夏休み後にはこの Map に、実際に訪ねた所を生徒、教職員に記入してもらい、共有した。初等部 6 年生も夏休みの取り組みとして、戦争関連の番組を見たり、関連施設を訪ね、その実践を専用の用紙にまとめた。それらについても展示をした。

児童・生徒・学生、教職員が訪ねた場所は、国内では東京、宮城、沖縄、新潟、北海道、神奈川、埼玉、鹿児島、長崎、国外はカンボジア、フィンランド、デンマークと多岐にわたった。

②今の世界～燃え広がる戦火（1 学期～）

最高学部講師の西崎香先生（国際ジャーナリズム）に新聞各紙の記事から時事問題を解説いただき、記事と共に展示をした。この企画は現在も継続している。

③平和週間関連展示（2 学期）

中等部高等部では、10 月に平和週間として学びの時を持った。その際に視聴する映画の監督やご講演いただく講師の方に関する展示を行い、事前学習の援助を目指した。

④JIYU1123特別展示「自由学園と戦争～記録資料から学び、今に活かす」（11 月 23 日～12 月）

JIYU1123 は学園主催の行事で、一般に開放されている。図書館ではこの日より、戦争に関係する学園の資料を展示した。自由学園は戦災による資料の焼失を免れたため、戦前戦中の一次資料も多く現存している。先の『自由学園一〇〇年史』はこれらの資料を基に編んだ内容だが、今回は関係する一次資料や、多く残されている写真を中心に展示を行うことにした。

会の当日は約 600 名のお客様に見ていただくことができた。また、その後も縮小して展示を継続し、11 月 23 日当日は忙しくて展示を見られなかった生徒学生にも見てもらうことができた。

本年報では、この企画で展示したパネル内容を再掲し、展示品リスト（目録）も収録する。

Ⅰ．はじめに

2025年はアジア太平洋戦争が終結してから80年、戦争の記憶・記録を継承していくための取り組みが各地で行われています。一方で、世界各地で戦闘状態が続いている現実があります。不安定な国際情勢のなかで「防衛力強化」が叫ばれている今日、私たちは真に平和を創りだす方向に歩んでいるでしょうか。

今年、自由学園では特に「ピースメイカー」になるための学びを意識し、各教科はもちろん様々な活動において平和を創りだすための学びに取り組んでいます。当図書館・資料室でも、７月から「現在（いま）は戦後か？戦前か？」をテーマに様々な展示を実施しています。

このたびは第3回展示として、自由学園の児童・生徒・教職員が戦時期に書き記した多様な記録資料を展示し、併せてそれらの作成経緯や保存・活用の取り組みについても紹介します。また、実際に「記録資料を読んでみる／見てみる」ワークショップも行います。当時の生徒たちの思いにふれ、戦争と教育との関わりをより身近に感じていただければ幸いです。

記録資料から学び、今に活かす――本展示を通じて、その可能性についての対話や新たな行動が始まることを願います。

自由学園図書館・資料室



2．自由学園の沿革　1930年代まで

自由学園は1921（大正10）年、羽仁もと子、吉一夫妻が主宰する雑誌『婦人之友』の読者を支持母体として、女子教育（女学校と高等科、7年制）として創立した（設立者：羽仁吉一、学園長：羽仁もと子）。キリスト教を土台とする自由教育を目指し、高等女学校令に拠らない各種学校であった。

徐々に教育の範囲を初等教育（1927年小学校設立）、男子中等教育（1935年男子部設立、各種学校）へと広げ、幼児生活団（1939年発足）の活動も各地で展開した。最初の校舎は池袋にあったが（現自由学園明日館）、1930年代に東京の北多摩郡久留米村（現キャンパス）に移転した。



自由学園本科最初の生徒（1921年）



男子部開校式（1935年）



小学校南沢校舎前で（1930年）

1930年代の自由学園は、狭義の学校教育の枠をこえて「学校から社会へ」活動を広げ、より良い社会形成に貢献しようとする活動が活発化。女子卒業生達による社会活動も大きく展開した。社会的な教育活動は、1931年満州事変以後の世界情勢の変化や対日関係の悪化にあって一層重要な活動と認識され、国際的な教育会議や婦人会議への参加、アメリカ・中国の教育関係者・キリスト教関係者との親善交流等も行われた。羽仁夫妻は教育を通じた相互理解や平和構築に関心意識を抱き続け、日中戦争中の1938年5月、北京に自由学園北京生活学校を設立した（1945年敗戦後に中国に接収）。



卒業生グループによる
消費組合活動（1932年）



羽仁もと子、世界新教育会議で
講演（1932年）



北京生活学校生徒が制作した
壁掛け（1940年）

3．「戦時」生活即教育

自由学園がその教育と社会とのつながりを強め、のちに「自由学園の黄金時代」とも言われた1930年代は、満州事変（1931年）、国際連盟脱退（1933年）、盧溝橋事件以降の日中戦争の全面化（1937年）等、日本が戦時体制に入る時期とも重なっていた。「国民精神総動員運動」や「戦時の社会改革」の動きに対して、自由学園はこれまでの生活教育や社会活動の経験や組織を活かし、種々の戦時生活刷新運動に主体的に取り組んでいった面があった。

1930年代後半から40年初めにかけて、時局の必要に対応したテーマが教育的に取り組まれるようになった。女子部では戦時の国民生活に必要な消費節約、貯蓄、代用品、労力の共同化などによる「合理的生活」が研究された。

新設された男子部では、力学・光学等の基礎知識を学びながら様々な「工作」を行う総合的な科学技術教育が構想され、学内に「産業」拠点を自分たちで建てる「実学」（養豚、養魚、水力発電、印刷所、実験工場等）が行われた。こうした取り組みは時局の必要とも「接続」し、学校農場(那須農場)の建設、食糧増産、軍需工場の部品製造を行う「勉強」として展開した。

このように、自由学園教育はその理念・方法を継続させながら、戦時下における生活即教育（「戦時」生活即教育）に取り組んでいったのである。



男子部生徒、実験工場を建築（1941年）



男子部での養豚（1940年代）



女子部卒業勉強「協力食事・協力裁縫」の提案
『婦人之友』1940年6月号

4．学校存続問題、勤労奉仕・勤労動員

戦局の長期化・悪化とともに、学校教育はさらに統制が強まった。中等教育令（1943年1月）により中等教育の一元的管理がすすみ、「各種学校」（その他の学校）の整理（廃止）方針が示された。これまで高等女学校や中学校の枠組みにとらわれずに自由な教育を行ってきた自由学園（女子部および男子部：各種学校の七年制中等教育）は、学校存続の危機に立たされた。

各種学校整理方針の背景には、思想取り締まりの側面だけでなく戦局の長期化に伴う国内の労働力不足があったといわれる。「不要不急」の各種学校（多くは女子教育）を廃止・軍需工場化し、女子の労働力を確保することも重要課題であった。

1943年から44年にかけて、自由学園は学校存続にむけて学則変更申請等を行い、文部省等との折衝を重ねた。このなかで校名「自由」の変更が繰り返し要求されていたが、創立者夫妻は関係者の支援を得ながら粘り強く対応し、校名変更することなくこの問題を乗り越えた。

ところで、戦時下で「自由」を掲げる自由学園教育は危険視されつつも、他方で時局に「有用な」教育として評価されていたという面がある。

国は戦争遂行に伴う労働力不足に対処すべく、中等学校以上の「学徒」の「勤労奉仕」や「勤労動員」政策を推進し、食糧増産や軍需工場での労働等を「教育の一環」として学徒に担わせたが、元来自由学園における「勤労」は自治的な生活の観点から創立当初から重視されていたものである。こうした「生活即教育」が、戦時期においても自前の理念・方法によって行われ、かつ国からの指示とも対応する形で継続・展開した面があった。つまり、自由学園の「戦時」生活即教育には、戦争に協力した／強制されたと単純に言い切れない複雑なあり様が内包されている。

（女子部、男子部の戦時の生活即教育の取り組みについては、次の展示をご覧ください）



男子部　実験工場日誌（1943～44年）



勤労報国隊日記（女子部普通科4年　1944年）

5．教育活動の中断、生徒・卒業生の死

1944（昭和19）年度から、学徒勤労動員は通年動員態勢となり、自由学園でも女子部・男子部の上級学年から順に近隣の軍需工場に動員された。他学年も学校農場（栃木県那須）や校内で食糧増産などの労働に従事した。初等部は同年夏から低学年は学内寮へ、高学年は栃木県那須にある農林省管轄の馬事研究所宿舎に集団疎開した。同年11月からは東京への空襲が始まり、初等部、生活団の教育は事実上中断した。

1944年11月4日、日立航空機立川工場に出勤する生徒達を乗せたバスが列車と衝突、女子部高等科２年の赤木ニ葉、高松和子、古川寿美の3名が死亡した。12月3日には女子部高等科3年生の川田文子が、勤務していた中島飛行機武蔵製作所で空襲に遭い死亡。こうした死に直面しながらも、生徒たちの工場勤務は継続された。吉岡豊香は1945年卒業後、郷里広島で被爆死した。

1935年に設立した男子部は少人数制で、1944年度までに83名が卒業した。男子部卒業生は兵役上の特権を持たず、いわゆる一兵卒として軍務に就いた。1944年末から、出征した卒業生の戦死の知らせが次々に入るようになった。終戦後、判明した男子部卒業生・在学生の戦没者は12名（石川安次、植竹誠郎、大倉裕利、木下恰作、芦澤久直、木下廣雄、後藤光男、船越純一、安田文信、坂田慶二、 辻信一郎、木下公雄）である。

キャンパス内に建つ三つの慰霊碑には、これらの方々の名前が刻まれている。このほか、疎開等のため休学や退学を余儀なくされ、帰省先で被爆や病死した生徒たちがいた。引き続き調査・記録に努め、不戦を心に刻んでいきたい。



男子部慰霊碑
（1971年　男子部生徒制作）



女子部慰霊碑（2000年建立）



女子部慰霊碑
（1987年女子最高学部学生制作）

6．戦時期の記録を引き継ぎ、今に活かす

自由学園キャンパスは空襲等による被災を免れたこともあり、学内に多くの戦前・戦中期の記録資料が残された。これらの資料は1950年代から女子最高学部の学生（図書記録グループ）、男子部生徒、各部教職員らによって保存され、卒業生たちも収集や整理に尽力してきた。

2002年に自由学園資料室が発足、自由学園全体の活動記録（自由学園アーカイブズ）の管理と活用を目指して本格的な整理調査が始まった。同時期に最高学部（大学部）が再編され新カリキュラムが始動、自由学園の記録資料を用いた研究も活発に行われるようになった。特に戦時期自由学園を研究テーマとした共同研究・卒業研究は、多方面から継続的に取り組まれている。

近年、自由学園では自校の記録資料、特に戦時期の記録資料を学校生活の様々な場面で紹介、記録資料の活用が進んでいる。初等部6年生の社会科、中高のTLP（キリスト教と自校史を学ぶ科目）、探求、共生学等で「自分たちの学校と戦争」を記録資料（一次資料）をもとに学ぶ機会が増えているほか、様々な科目の授業、礼拝、生徒委員会の調べもの、卒業研究などで活用されている。

戦後80年――かつての戦争は遠い過去のものになっている一方で、私たちの現在は「戦争」と決して遠くない位置にある。今、私たちに手渡されている戦時期の記録を「自分たちの記録」としてあらためて受けとめ、平和を創りだすためのこれからの歩みに活かしていきたい。



「戦時下の初等部」
初等部6年生社会科
（2024年）



探求活動をもとにした
『川田文子さんのこと』
（2022年刊行）

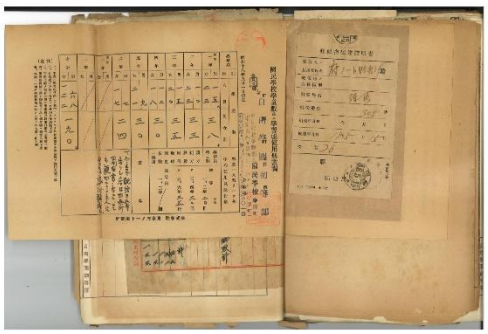


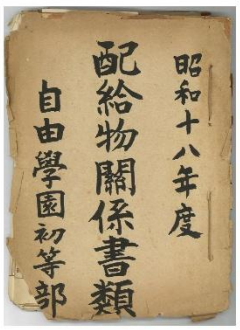
「戦時中の資料を読む」
中高共生学（2025年）

① 初等部と戦争

国民学校令と校名変更

自由学園小学校は1927（昭和２）年に開校しました。1937年国民精神総動員運動の開始から、慰問袋の作成や宮城遥拝が行われ、1940年からは学用品の配給制度が始まりました。1941年国民学校令により、私立小学校は「国民学校」と名乗ることが許されなかったため、自由学園初等部と名称変更しました。





昭和十八年度　配給物関係書類　自由学園初等部

空襲の激化と学童集団疎開

1944年の2学期（8月下旬）から、武蔵野鉄道で中村橋駅よりも都心寄りに住んでいる児童は、学園内の女子寮へ疎開をしました。同時に地方への学童集団疎開も検討され、1944年9月から、当時の5，6年生は栃木県那須にあった馬事研究所へ集団疎開を行い、終戦後1945年10月末に帰京するまで、当地で疎開学級が実施されました。都内国民学校は都から疎開場所の振り分けがありましたが、私立学校は独自に探さなくてはなりません。当時初等部保護者に馬事研究所職員がおり、その保護者の紹介で、兵役のため住む人がいなくなった官舎を貸していただけることになったのでした。

1945年からは4～6年生が那須へ疎開、空襲がひどくなった都市部では1～3年児童の通学も危険と判断され、家の近い児童で集まりそこへ教員が教えに行く形がとられました。南沢の初等部校舎は学校工場として使用されました。



疎開中の荷物運び（1944年ヵ）



帰京前の集合写真（1945年10月）

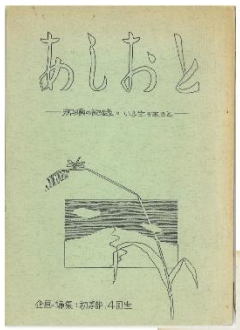
② 初等部　疎開の記録

今に生きる記録資料

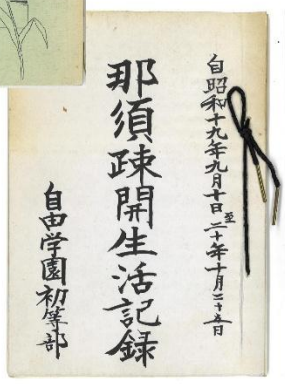
終戦後、1945年10月に集団疎開していた4～6年生が帰京します。同年に疎開を経験した児童たちがその様子を絵と文章にしたものが「疎開絵巻」です。疎開が始まった1944年9月から、終戦を挟んで1945年9月までの出来事が描かれています。



初等部疎開絵巻全5巻より（1945年）



あしおと
（1977年）



那須疎開生活記録（1987年）

1944年に5年生だった初等部14回生は1945年10月末まで、一番長く那須疎開を経験した学年です。このクラスの深田未来生氏が中心となって編纂された『あしおと―那須の記録・いま生き生きと―』（自由学園初等部第十四回生クラス1977年）には、当時の児童が親に送った手紙の内容や日記、後の回想が収録されています。

初等部教員であった村上せつ（自由学園女子部6回生）は戦後、この那須疎開の記録をまとめています（「自昭和十九年九月十日　至二十年十月二十五日　那須疎開生活記録　自由学園初等部」1987年作成）。

これらの記録資料は現在も初等部の社会科の授業などで使用され、戦中の暮らしを学ぶ助けとなっています。

③ 幼児生活団と戦争

空襲の激化で登団できず

すべての子どもが健康な心身を自分自身で獲得できるように、ということを目指した1938（昭和13）年開催の「幼児生活展覧会」（婦人之友社創業35周年記念）をきっかけに、1939年に生まれたのが幼児生活団です。展覧会が全国をまわった後、友の会員や自由学園卒業生によって各地で生活団が始められました。子どもを一人の人格として認め、その独立と協力を、「生活」を舞台に体験するカリキュラムは、生活団でのプログラム（週1回）と、家庭で過ごす時間の両方で営まれました。

目白の幼児生活団では、1943年から宮城遥拝が行われ、1944年に空襲がひどくなると、登団が困難となっていきます。その後、初等部低学年と同様に、家の近い子ども同士で集まって、そこへ指導者が出向き、活動を行ったという記録があります。

地方生活団も、特に都市部では空襲がひどくなり、教育活動を一時中断した所が多くありました。





セイカツダンカイランバン（1944～1945年）
登団できない時期に、生活団でのプログラムを家庭でもできるよう、回覧板にして近所でまわした。







公森文子（元生活団指導者）スクラップブックより（1944年）
警戒警報発令時に関する家庭へのお手紙（右）や、当時のはげみ表（中、左）等が残されている。

④ 戦時であってもすべての子どもたちへ

少ない紙面でも子どもを想って

すべての子どもの健康を願った羽仁もと子・説子は『子供之友』誌上でもさまざまな記事を掲載していましたが、雑誌統制のあおりを受けて同誌は1943年12月に休刊となります。その後、1944年1月からは『婦人之友』の裏表紙を使って、「子供の生活指導」を連載しました。紙の制限でページ数が少ない中でも貴重な紙面を使ったのは、子どもを想ってのことだったのでしょう。

戦後、食糧難等の中で幼児の健康や生活に危機感を持った羽仁説子の「もっと生活団を」との呼びかけに応え、『婦人之友』読者を中心に全国の家庭や友の会などで生活団が行われました。空襲などで一次中断をしていた各地の生活団も再開していきます。





『子供之友』1943年12月号
「甲子上太郎セイクゥツカルタ」では、規則正しく活発な生活を呼びかける文言が並んでいる。









「子供の生活指導」『婦人之友』1944年1～12月号より
生活団で実践されていた生活講習の内容を中心に、記事がつくられている。

Ⅱ「自由学園と戦争～記録資料から学び、今に活かす」展示資料リスト

展示場所	資料名	年代	資料番号
入口～学園史資料コーナー本棚	挨拶・全体パネル（展示説明・自由学園の戦時期について）４枚		
展示ケース1～3【初等部、生活団】	初等部疎開絵巻　第3巻：正月　昭和二十年一月～三月	1945年1月～３月	20220463003
	初等部疎開絵巻　第5巻：昭和二十年六月～九月	1945年6月～9月	20220463005
	羽仁説子原稿6回生　　－14 昭和20年3月　6才3学期　卒業式プログラム	1945年3月1日	20172185002
	セイカツダンカイランバン	1944～45年	20221137001
	『婦人之友』表４	1944年	
	あしおと（閲覧用）	1977年	2013321001
閲覧室机1【女子部】	「自由学園学術叢書第一　霜柱の研究　布の保温の研究　自然科学グループ」	1937年	20150123001
	「協力裁縫・協力食事」および口絵『婦人之友』1940年6月号		
	［まとめ］　小野和歌子　昭和十六年度　普通科四年　寮生　出席完全	1941年度	2012160001
	財産の台帳　女子部［女子部20回生卒業制作　昭和17年4月　学校のものをすべて記載した財産台帳　現物の絵入り　付：1942年9月5日供出の鉄・銅製品リスト］	1942年4月1日	20250101001
	［農繁期農村勤労奉仕関係史料　昭和18年～昭和19年］	1943-1944年度	20240192001
	［婦人之友社　羽仁吉一・もと子宛　勤労奉仕隊生徒からのはがき（報告：高等科2年（24回生））昭和19年6月（37通）］	1944年	20240196001
	[昭和18年度　普通科4年秋元和子　個人生活表、予定と生活記録]	1943年度	20160339001
	[昭和19年度　高等科1年1組秋元和子　個人生活表、健康表、茨城県真壁郡への勤労奉仕期間中の健康表]	1944年度	20160339002
	自由学園　勤労報国隊日記（五）女子部普通科4年（昭和19年11月12日より12月10日まで）	1944年11月12日～12月10日	20180047005
	[織田智子（旧後藤智子、J25）さんが戦時中学園から家族にあてて書いた手紙　日付不明　昭和20年春ごろヵ]		20161219001
	[織田智子（旧後藤智子、J25）さんが終戦直後に8月15日からの自由学園の生活について家族にあてて書いた手紙　昭和20年8月23日　コピー		20161220001
	中島航空金属田無工場　発動機部品の鋳物木型　26回生　1944年（昭和19年8月）[三木芳子（鎌倉芳子）さん製作　2個]	1944年	20180054001、002
	木型　建築　中條春枝　［女子部26回生　戦時中中島飛行機田無工場動員中の木型づくり講義ノート・戦後建築講義ノート]昭和19年頃～ヵ	1944年、1945年	20180052001
閲覧室机2【男子部】	［新井正夫ノート　工作復習帳　担当：三石巖　男子部2年］	1939年	20220729001
	「自由学園男子部 第一回教育報告会記録」より	1936年12月	20150142001
	「学園農場那須に決定／工作教程試案」『学園新聞』133号（1941年4月30日）1面	1941年	20250206001
	「日誌　自由学園実験工場　［宮嶋眞一郎］	1943年10月31日～1944年4月22日	20250213001
	［男子部　工作室・実験工場・豚舎等配置図］＊裏面に工場作業日ヵの基本時間記載	1943年ヵ	20220735001

	［男子部工場記録：男子部2回生旋盤制作記録ヵ／卒業生（赤木英哉ほか）測定器製作記録・測定記録詳細／内面研磨盤主軸回転制度測定器製作記録昭和18年9月1日～10月23日／ほか］	1943年	20220734001
	D3篠遠喜彦による記録ノート（退避壕掘り、縄文時代住居跡発見）、卒業論文（1943年9月ヵ）	1943年	未登録
	自由学園男子部第一回卒業式　昭和十六年十二月二十八日［式次第］	1941年12月	2013683001
	自由学園男子部第二回卒業式　昭和十七年九月二十七日［式次第］	1942年9月	20240460002
	自由学園男子部第三回卒業式　昭和十八年十月三日［式次第］	1943年10月	2013684001
	自由学園男子部第四回卒業式　　昭和十九年九月二十八日［式次第］	1944年	2013685001
	「南沢自由学園農業報告書 自：昭和十七年十月 至：昭和十九年一月十九日」（全文）「羽仁先生に感謝の言葉（男子部第2回卒業式）」「戦地より父母宛の最後の手紙 昭和二十年一月」男子部2回生 木下廣雄[野田清子さん（Ｊ23）全文書きおこし］	1942-1944年	20150511001
	「学園食糧増産計画一覧図」『学園新聞』131号（1941年2月28日）2-3面	1941年	20250206001
閲覧室机3【戦没者・慰霊碑】	「教育報国」他『婦人之友』1944年12月号	1944年	
	日番報告書　1945年11月　1945年11月12日追悼会記述	1945年	
	川田久長著『活版印刷史』（印刷学会出版部　昭和24年3月20日発行	1949年	20151297001
	［男子部卒業生戦没者遺影　11名　1955年5月1日10枚、1972年6月18日11枚展示］	1955年	20220826002
	太平洋戦争　学徒動員中戦禍に没した友を記念して　昭和62年5月16日［完成した女子部65回生卒業制作の記念碑を前に礼拝と記念会が行われた　当日のプリント］	1987年	20231463001
	「自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して」[1995年]	1995年	20150430001
大型本上の棚	戦時期に関する卒業論文、資料集、TLP、共生学などの紹介		
	平和を考える-戦争の歴史を学び伝える　中等部2年：前田なつき・佐藤姫琹梨　［学びの共有会2024年度　共生学発表ポスター（2枚組）2025年2月28日～3月2日開催］	2024年	20250164001
	『おじいちゃんの戦争』（漫画：山澤遥乃、語り：山澤夫司雄、自費出版、2025年） 『川田文子さんのこと』（山澤遥乃、山澤綾乃著、自由学園出版、2022年）	2025年	
ワークショップ	食の記録（学園および寮の献立、原材料、分量の記録）	1944年８、１２月、1945年８月、冬休み	20230493001 20230497001 20230504001 20230509001

同写真リスト

展示場所	当日のキャプション	資料番号
閲覧室絵本書棚上	1945年頃　畑になった大芝生	20170125001
	1945年頃　畑になった大芝生での作業	20191716008
	1941年　大芝生の陸稲	20182321001
	1941年　大芝生陸稲の収穫	20190251001
	1944年女子部講堂と科学室の間のジャガイモ畑	20191516004
	1943年　男子部体操館前畑（小松菜）	20201434001
	1943年　男子部畑（小松菜）	20182322001
	1941年　羽仁吉一陸稲の収穫	20191513004
	1944年　カボチャの収穫	20190262001
	1945年頃もんぺ姿で体操（女子部食堂前）	20190266001
	1943年　託児所での勤労奉仕（女子部22回生　福島県鎌田村）	20190254001
	1941年　共同炊事勤労奉仕	20190252001
	1943年　共同炊事（女子部高等科3年）	20191515003
	1944年　動員先の工場で各学校選抜生と女子部22回生他で記念撮影（前列左端女子部23回生川田文子さん）	20191516001
	1939年頃ヵ　男子部軍事教練（現テニスコートのあたり）	20191511001
	1940-44年　男子部軍事教練（現大芝生）	20200396001
	1944年　実験工場で働く女子部生徒	20190264001
	1942年頃ヵ　男子部実験工場での作業	20200471001
	1945年頃ヵ　初等部体操館学校工場に	20200473001
	1943年頃ヵ　幼児生活団宮城遥拝	20210323033
	1938年　初等部宮城遥拝	20201305001
	1944年　女子部高等科2年３名の学校葬（講堂）	20191516002
	1987年　慰霊碑前での記念礼拝	20191597002
	1942年　開拓期の那須農場で作業をする男子部生徒	20191614007
	1942年　那須農場第一回収穫感謝祭	N3000002-38
	1944年　武蔵製作所第一回女子動員学徒大会	20191715007

Ⅲ「自由学園と戦争～記録資料から学び、今に活かす」展示看板パネル



Ⅳ展示を見ての感想(高等部 1 年)

「明日館の資料で見た時も芝生を畑にしていたが、大芝生、食堂前芝生でも畑を耕していたのは初めて知った。食糧の供給が間に合わないなら学校で作る、それにみんなで協力して取り組んでいったのがすごいなと思った。」
「大芝生が畑になっていた写真に驚いた。」
「やはり自由学園の子たちも戦争の被害で亡くなった人もいるんだなと思った。大芝生が田んぼになっていたことに驚いた。」
「戦時中なのに献立ができるくらいの食糧があった。それは大芝生とかを畑にして自給自足をたくさんしていたからだと思った。また男子部は戦争の訓練もしていた。」
「私はまず羽仁吉一、もと子宛農村勤労奉仕隊生徒(高等部 2 年)からの報告はがきを読んだ。これを読んだとき、私は体がふるえました。きれいな字で書いてあるけれど、そこに書かれているのはありのままのつらい毎日のこと。つらくて、家族とも会えなくて、きっと悲しいはずなのに、それでも頑張って生きようとしている姿。そのことを、他の人が見たら小さな紙切れなのかもしれないけど、本当にすごい「いのち」の手紙。」
「疎開をしていたことを知らなかったです。今でいう公立私立で違いがあることに驚きましたが納得もしました。戦争のなかでも「生活」を大切にする～心の安定にもつながったのかな。」
「自由学園と戦争は思想が違いすぎるなと思います。歴史をたくさん感じました。」
「たくさんの資料を見て、自由学園は昔から学園で戦争が進んでいく中で「自由」の危機があったというのでめちゃビックリした。だけど羽仁夫婦がしっかりと方針(？)をもって動いていてすごい信念を感じた。疎開もしていたらしい。とても面白かった。今戦後か戦前かっていうのが言われている中で、今の僕達だからこそ学べるものがあるんじゃないかなと思いました。」
「今の時代から見たらそれなり、というか普通の食事で涙を流すなんてよくわからないけれど、戦時中と言われたら、すごく豪華な食事なのでは？と思いました。またみんなで食事できるありがたさを改めてこの資料からは感じることができてよかった。」
「自由学園初等部という名称変更の理由、他にもこんなふうに戦争の残っていることがありそう。きっと普通に農作業する分にはあまり日常と変わりなくて、ふとした瞬間に思い出すものだったのかなと写真を見て思ったりした。」
「昔の献立表などがあって、今ではでないようなものがあったり、さつまいもばかりだったり、一食だけの日もあったりしたのがびっくりした。米やパンはなかった。昔の学園の地図みたいなものには、今ではいない池にも鯉がいると書かれていておどろいた。今と昔では違う部分が多くあるんだなと思った」
「巻もの(初等部の疎開絵巻)について、みんな絵がうまいなと率直に感じた。戦時中だからガラスペンなどの消えないペンで書いていると思ったら、絵具で描いてあったからだ。可食部について記したものについて、私の探求である「食料問題解決のために昆虫食やゲテものを食べられないか」というものに使えると思った。無駄なく食べられる。大芝生が畑だったころの写真の中には防空壕がハッキリ写っていて、生々しかった。また、人間にとって苦痛であるべきであるが、探求心からほりかえしたくなった。」
「講堂前の池にも鯉がいると知ってびっくりしました。本当に食糧が足りてなかったんだと思い、日々のありがたみを感じました。」
「献立表を見て肉がないなと思った。あったとしても魚で大半は野菜で埋め尽くされていた。インゲン・トマト・かぼちゃが特に多く、魚はます、さば、たらと偏りがあった。見ても見てもほとんど同じ材料なのに、ドライカレーや野菜おこわなど種類が多く工夫があってすごいと思った。」
「自由学園の戦争時代の展示をみて、やっぱり戦争ってたいへんなことだと思いました。」
「記録を残しておくことはすごく大切だと感じた。今、こうして戦争中の記録を見られているのは特別なことだと感じた。みんなが日本のために一生懸命に働いていたことがとても伝わった。中1のころの共生学で戦時中の学園の様子(作物とか)をまとめていたことを思い出しました。」
「80 年も前の資料がこれだけの数残っているのはとてもすごいことだなと思った。戦争に影響されている部分は確かに多くあるけれど、それでも自由学園の生活を大切にしているのだなと伝わってきた。資料を見るだけでは当時の学園生の気持ちは、すべてはわからないけど、よりそう関心をもつことは大切なことだなと思った。」
「芝生が畑になっている写真があって、すごくびっくりしました。またどの写真にもスペースがあれば畑になっていて、今の学園と違いすぎるなと思いました。」

「生活即教育について深い歴史があるのだなと感じた。時間があったらしっかり見たい。」
「当時の作物は本当に少なかったのだろうなと思いました。また、戦争の恐ろしさを改めて感じました。」
「戦時中の日誌とか絵を見て、いくら昔の人でも戦時中の人でも同じ人間なんだと改めて思った。」
「同じ場所にある学園でも、畑をつくるなど違う土地の使い方をしていたり、生徒も戦争の影響で一日中学ぶことはできなかったことを知り、私たちは当たり前のように日々を過ごしているけれど、それはとても幸せなことだと思った。学ぶこととは勉強という意味では不十分だったかもしれないけれど、生徒＝子どもなので、皆戦時下では戦時下での働きなど、様々なことを学んでいたのかなと考えた。当時の貴重な資料や絵も見られて大変な状況の中でも皆が頑張っていたのがとても伝わってきた。」
「図書館の展示を見て昔の女子部男子部は記録しておくことを大切にしているなと思った。今自分たちが”やっていることを今後もつづけたいと思う心”が記録を残すことにつながったのかなと思う。今こうして展示をみて昔を知ることができているのでありがたいと思う。」
「写真や文章で当時の様子がくわしく記されていて、今も当時の様子を詳しく知ることができるのはすばらしいと思った。」
「当時の日記に、教も空襲があったがお守りのおかげで生き延びることが出来た、的なことが書かれていたのを読んで、いかに戦争が身近だったのかを感じ取りました。お守りのおかげで生き延びられたなんて健気だなと思いました。」
「バスと列車の衝突事故で亡くなった女子部 K2 のことを初めて知ったので、悲しくなった。そんなことがあってもなお、工場に行って働くことをやめられないというのはとてもおそろしいことだと感じた。自分の姉妹、兄弟たちも戦争で亡くなっているということをしっかり受けとめて生活したい。」
「今ある大芝生や講堂裏などが昔は畑だったことに驚いた。生活団で戦時中に登園できない子たちがセイカツダンカイランバンをやっていて、いいなと思った。」
「亡くなった男子部生のお写真を拝見できた。普段名前しか知らなかったので、今の男子部生の人とそこはかとなく似ていて、戦争で亡くなることを身近に感じることが出来、足が地についていないような感覚になった。(なんか不思議な感覚)。」
「幼児生活団の資料を見て、今まで見たことないあそびや習慣を見ることができたし、知ることができた。戦時中に亡くなってしまった人も多くいて、複雑な気持ちになった。」
「私は男子部生の写真(戦死された方)を見るのがはじめてだったので、こういう顔の人だったんだなと知ることができてうれしかった。顔を知ることで身近に感じられていいと思った。」
「初等部の資料を見て、みんなしっかり生きて基本時間を守っていたのがありありと分かって、しっかり保存されていることに感動した。冬休み中の献立でクリスマスに食べたごはんを見て、肉はもちろんないし日がたってくごとにどんどん食事が簡素になっていくのが戦時中ってことが分かってつらかった。きな粉だけとか食べて今がどれだけ平和か分かった。献立に次からは文句言わないようにしたい。」
「昔の自由学園は思っていたより何倍も農業に力を入れていることが分かった。写真を見ていて印象的だったのが、今の大芝生にあたる部分で陸稲を作っていたことに衝撃を受けました。また旧男子部芝生でも畑を耕している写真があったり、自由学園全体図の畑の位置が書かれている図から、学園内にはたくさんの畑があり、戦時中に食べ物に困ることは少なかったと感じた。逆に戦後の方が食べ物に困ったと書かれていた。」
「古写真に見る、の 24 枚の写真を見て、戦争が起っていたという実感がわいた。実際に今、自分たちが生活している場で、昔は畑作業をしていたり防空壕の穴があったりしていたと思うと感慨深い。今は新天地という場があって大芝生は学園のシンボル的な存在になっている。けれど昔はあの広い芝生で畑として作物を育てていたことに時代を感じる。おそらく作物を育てられる場所があるだけ良かったのだろう。先生が、防空壕には番号があって、自分の入るところが決まっていたとおっしゃっていて、今の災害の避難訓練のような訓練があったのかなと思った。」
「自由学園の学びを戦争に利用したのではなく、逆に戦争を機に学びを深めていたと感じるような内容でした。実践的技術を高めつつ日々の日常を捨てずに頑張って生きていた上級生はとても強い人たちだと思います。しかし、戦争で亡くなったりする仲間もいることは決して日常の中にいるとは言えません。」
「日本が戦争していたときの自由学園の様子が写真を観てよく知れた。いつも見ていた場所が戦争に使われていた事を実際に見て理解できた。」

「写真の中の校舎には、今と変わらない部分も多く、人と状況だけがすっかり入れ替わったようだった。」
「前にも大芝生が畑であったとかそういう話を聞いたことがあったけれど、写真で見るととってもすごい景色だと思った。女子部生徒のお裁縫の記録？のようなものもとても感心した。デザインがどれも学園らしいストライプだったりで現在と変わらないということ、同じ校舎に生きていたということを改めて感じた。」
「ひさしぶりに学園の戦争資料を読んだので嬉しかったです。学園内でも霜柱の研究が使われるなど日常の生活が戦争に使われてしまったのは本当に辛いことだと思いました。／2 年前の山澤さんの卒論を読みました。私は中2のときに 2 人にさそわれて朗読劇に参加したことがきっかけで文子さんのことを今しているのでなつかしかったです。あのときさそってもらって、やりたいと言って良かったなと改めて思いました。私の探求にも通じるのでまたゆっくり読もうと思います。」

■JIYU1123 当日の写真（一部加工）



入り口


初等部、生活団の展示


入口付近の様子


1 階閲覧室展示（1）


1 階閲覧室展示（2）


1 階閲覧室展示（3）


1 階奥に写真を展示した


閲覧室でのお客様